



寿 賀

年頭に際し皆様の御多幸を

ここから御祈り申し上げます。

本年も宜しく御願ひ申し上げます。

会員の皆様の益々のご健勝を申し上げます。

新年のご挨拶とします。

平成二十四年一月

日本杖道会

会長

神之田 常盛

役員一同

第34号

平成24年1月

編集・発行

日本杖道会

奉祝 明治神宮奉納武道会

人生儀礼を学ぶ

— 伝統あるしきたりと敬神の心 —

日本人は、昔から、人生の節目ごとに神様に奉告し、ご加護を願ってきました。ここでは、初詣から七五三詣、厄祓など、身近な行事の由来やしきたり、作法をご紹介します。

神前ではあまり堅苦しく考えず、素直な気持ちで日ごろの感謝を伝えたり、お願いごとをしたりするようにしましょう。

武道は、元來戦技として創始され発展してきたものでありますが、時代の推移と進歩等にあいまって、理論的にも実践的にも日常の行動規範となり、心となつて社会生活に定着し移行して参りました。

かかる観点から日本固有の武道であり、その目的は心技の鍛練を第一義とされております。

世の中の諸芸や諸道の研修には近道と言うものはなく、また行ずる者に限界や終着駅と言うものはありません。その理由は、精神を根本とする心の技であるからと言つても過言ではないと思います。

立派な人間とは心身共に健康のこととあります。「健全なる精神は健全なる身体に宿る」と言う格言があります。心身共に健康であり、豊であることはこの上もない幸せであり、人生における最高の財産であります。

当会が継承する武道は剣法を主とした古武術であります。老若男女を問わず、どなたにも研修することができます。体力、気力を養うことこそ大切であります。



明治神宮奉納武道会
主役 日本杖道会

筑波山神社奉納武道

平成23年12月18日(日) 第36回筑波山奉納武道大会が始まった。

神之田師範の居合いの露払いに引き続き、天道流薙刀術・居合・鎖鎌術・神道夢想流杖道・短杖術・神道霞流剣術等々の演武が奉納された。演武に先立ち昇殿参拝。

午後、筑波山ケーブルカーにのり、筑波山頂に向かう。山頂からは街並みが一望の下に広がり、水平・線には雨雲が低くたれ込み、山々には雨足がかすみとなって漂っていた。

筑波山は万葉の昔から、関東屈指の名高い山として関八州が一望できる景勝の山とされており、またこの地において杖道の流祖夢想権之助か日夜精進した武術修験場であったといわれている。

四百年前のこの山は、今より多くの木々に覆われ、風に揺れる木々の梢を通して淡い上弦の月を眺めることができ、夜には湿り気を含んだ大地と煌めく星空が広がっていたに違いない。そして修験者は、その大自然の中にあつて、己が無意識の世界から沸々と湧き出る業の真理と理合いを感じたのだと想像を逞しくした。

筑波山を下りると、その足で天道流薙刀術の始祖・斎藤伝鬼坊終焉の地である桜井の不動堂に向かった。薙刀の方々も同行



された。

東日本大震災で不動堂は瓦がすべて落ちており、瓦の代わりであるブルーシートでかろうじて守られていた。早急なる復旧を切に願いながら、各種武道の演武を奉納した後、斎藤伝鬼坊の墓に線香をたむけた。



歴史探訪

由井民部之助橋正雪

一心流鎖鎌術第五代、由井民部之助橋正雪（由比とも言われている）は幼名を久米之助と言ひ、駿府（静岡県静岡市由比町）宮ヶ崎で半農半商紺屋を営む、岡村弥右工門の次男に生まれ、幼少の頃より書を好み武芸をした。

町内に居住していた大阪浪人、高松半兵衛に武芸を習ひ今川義元の家来、由井美濃守正宣に軍学を学ぶ。十七歳で元服し、由井民部之助正雪と改め江戸



に出た。初め親戚の菓子商（春日局の御用商人）の手代となり、つるやの後継者となったが、家業に飽きたらず牛込の楠の後裔と称する楠不伝と言う老軍学者に出会い門人となる。

当時幕府は専制政治を行い、諸国の大名二十余の改易、取り潰しを行い浪人が続出、農民には厳しい年貢の取り立てをして、庶民は苦しんでいたため世情は不安定であった。

楠正成を尊拝する由井

正雪は、同志丸橋忠弥と共に徳川幕府を倒し天皇による政治を復興するため「慶安の変」と言われる慶安四年七月二十四日同志と共に立ち上がった。

事前にこの企みが発覚して幕府から追及され七月二十五日駿府（静岡県）梅屋旅館にて同志と共に切腹自害した。

その後安倍川原に於いて斬首され、曝首にされた。

尚、正雪の首塚として菩提樹院（静岡市葵区沓谷一三四四―一）にあり位牌は来迎院英長寺（山田尙孝、静岡市樽内町一〇二）にある。

正雪地蔵尊

東京メトロ東西線（神楽坂駅）下車、新宿区矢来町二丁目新潮社本社先、秋葉神社境内左側に「正雪地蔵尊」のお堂があり、約五〇センチの褐色の石塊がおかれている。

正雪は最初神田連雀町（現在の神田須田町付近）の裏店に五間の家を借りそのうち三間に手習子を集め、二間を住居として使っていた。

当時の地図によると神田川近くで、筋違橋、昌平橋、西念寺の近くであるが調査するも所在不明である。



